

本論文は、東京女子高等師範学校附属高等女学校の事例を中心として、明治から昭和初期までの女子生徒服装の歴史的変遷を具体的資料に基づきながら検証し、女子学校制服の成立・変容過程を考察したものである。発表では、まず、本論文の学校制服の定義及びそれに基づく時代区分を提示し、学校制服の成立・普及過程を具体的に報告する。本論文では、学校制服を「生徒」を表す衣服に所属する「学校」を示す徽章が付けられた服装と定義し、女子における学校制服の成立(袴+徽章)を1900—1910年代とした。これまでの先行研究では、着用の義務づけの有無が学校制服の成立要件とされ、学校が生徒に及ぼす一方向的かつ管理主義的な関係性から学校制服が捉えてきた。これに対し、本論文は学校制服を学校が一方向的に与える規則ではなく、生徒や保護者などの要望や価値観を反映しつつ徐々に形成され、身分と所属を表す服装として成立したと捉え、その形成過程に孕まれた様々な解釈や価値づけを検証することを試みた。とりわけ徽章を定義の要件に加えた理由は、徽章の佩用が在学期間に限定され、入学時に付け、卒業時に外すという循環を生み、毎年度卒業生と入学生が入れ替わりながら学校制服を継承するパターンが成立したからである。こうした継承の仕組みは、着用願望、学生時代の象徴、帰属意識や愛校心などの学校制服に投影される感情や価値観を生じさせたと考えられる。以上の定義より、女子の場合、袴に徽章が付けられた段階を「学校制服の成立」(1900—1910年代)、それ以前を「学校制服成立前史」(1880—1890年代)、袴から洋服への変遷を「学校制服の変容」(1920—1930年代)とし、発表では学校制服の受容・実践の諸相を具体的に報告する。

また、本論文では、学校制服として主流となった袴やセーラー服の陰であり注目されてこなかった改良服や標準服の事例を取り上げた。これらは広く普及しなかったために、記録に残りにくく、一時的あるいは少数派の実践として軽視されてきた。発表では、これらの改良服や標準服の実践を取り上げ、学校制服の成立・変容の背景にあった近代における服装文化形成の揺らぎや葛藤、悩み、試行錯誤の軌跡を合わせて報告する。